



平成22年9月6日  
卓話 『フィンランド流 社長も社員も6時に帰る仕事術』  
出版翻訳家・作家  
富士通コンピューターズ・ヨー ロッパ 元副社長  
田中 健彦 様

私は富士通を5年前に退社してビジネス書の翻訳をしておりますが、この3月に「フィンランド流 社長も社員も6時に帰る仕事術」という本を書きました。販売部数も上がりまして、こういうことに対する世の中の関心は強いんだなあとつくづく感じました。

私は10年ほど海外に勤務していた間にいろんな生活を見てきました。日本人とは仕事のやり方、生活のやり方が非常に違うんですね。仕事はなるべく短く、プライベートの生活は長くという考え方です。世界中でお父さんが夜10時、11時まで働いてへとへとになって帰ってくるのは日本だけ。しかも最近は共働きが多い。現在のお母さんは家事、子育て、自分の仕事と、3重の負担を負ってるんですね。これは大変です。お父さんもお子さんの寝顔しか見たことがないからお子さんがどういう興味を持ち、悩みを持っているか理解してない。お子さんも登校拒否が増えて、最終的には家庭内暴力だとか自殺だとか、いろいろ起きている。こういうことを見せつけられると、若い方が結婚したり子供を産んだりする気にならないんじゃないかな。こういう意味で、今の日本は子育て支援が2万6千円だ1万3千円だという議論よりもっと深刻なのではないか。私はそれを心配してこの本を書きました。

私が初めてフィンランドに転勤して間もない頃、会社で役員会議をしておりましたら午後3時ぐらいに社長がすくと立って、ちょっとこれで失敬すると言うんです。息子をサッカークラブに送っていかなきゃいけないと言うんですね。役員会議の真っ最中ですよ。ところがもっと驚いたことには他の役員も社員も午

後4時になるとどんどん帰り始め、6時になるともう会社はがらんとしてる。

フィンランド人は非常に教育熱心で、お子さんが小学校、中学校に入るとバレーだのサッカーだのホッケーだののクラブに通わなきゃならない。そこで親が学校に迎えに行って子供を送って行くんですよ。フィンランドでは子供は国の宝だというマインドが非常に強い。だから子供を大切にすることは国全体が認めている。これはスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、みんな同じ。こんなことで会社は成り立つかとお思いかもしれません、ご存知の通り、イケア、ノキア、H&Mなど北欧の会社はどこも絶好調です。

部下に仕事を与えるとき、フィンランドではそれ以降は介入しないで任せます。ホウレンソウはいらない。それでいて納期には大抵きっちり仕上がってくるんですね。これにはそれなりの理由があって、まず上司が最初に仕事を与えるときにしっかりと仕事を定義するんです。部下は部下で仕事の中身をちゃんと計画分析してそれから受けます。そういう所が非常にはっきりしている。

今、フィンランドのやり方を勉強したら、きっと日本人にとってもいいことがあると思います。影響力の大きい皆さまです。よろしくお願いします。

